



元気そらち！産炭地域活性化戦略

用語解説●^{やま}炭鉱の記憶と炭鉱遺産

^{やま}炭鉱の記憶：空知地域の炭鉱が栄えた当時の姿・様子（産業・石炭生産の姿、まちなみ・風景、炭鉱に働く人々の働く姿・暮らし・文化など）を、現在に語り継ぐ、様々な記録や情報

^{たんこういざん}炭鉱遺産：〈炭鉱の記憶〉のうち有形のもの

この戦略が訴えるもの

青春とは 人生のある期間ではなく、

心の持ち方を言う。

薔薇^{ばら}の面差し^{おもぎ}、紅^{くちびる}の唇、しなやかな手足ではなく、
たくましい意志、ゆたかな想像力^も、炎える情熱をさす。

青春とは 人生の深い泉の清新さをいう。

青春とは 臆病^{おくびょう}さを退ける勇氣、

安きにつく気持ちを振り捨てる 冒険心を意味する。

ときには、20 歳の青年よりも 60 歳の人に青春がある。

年を重ねただけでは 人は老いない。

理想を失うとき 初めて老いる。

歳月は皮膚にしわを増すが、情熱は失えば心はしぼむ。

苦悩・恐怖・失望により 氣力は地に這い精神は芥^{あくだ}にある。

60 歳であろうと 16 歳であろうと 人の胸には、
驚異^{きょうい}に魅かれる心、おさな児のような未知への探求心、

人生への興味の歡喜がある。

君にも吾にも 見えざる駆遣^{くせん}が心にある。

人から神から 美・希望・よろこび・勇氣・力の

靈感を受ける限り 君は若い。

靈感が絶え、精神が皮肉の雪におおわれ、

悲嘆の氷にとざされるとき、

20 歳であろうと 人は老いる。

頭^{こうべ}を高く上げ 希望の波をとらえる限り、

80 歳であろうと 人は青春にして已^やむ。

サムエル・ウルマン「青春」(作山宗久訳、角川文庫版)

この戦略は、空知産炭地域が、直面する山積した課題の前に悲嘆の氷にとざされ立ちすくむ状況から脱却して、たくましい意志、ゆたかな想像力、燃える情熱を持った地域へ再生するために、理想に向けた活動によって、安きにつく気持ちを振り捨て自らの力で歩むための道筋を示したものです。

具体的には、地域の足もとにある固有の資産である《炭鉱の記憶》を活用して、地域外の人から美・希望・よろこび・勇氣・力を受けることによって、地域内の人が頭を高く上げ希望の波をとらえる心を持ち行動するための条件を整えようというものです。

目次

はじめに	1
背景●世の中の大きな変化…これまでの常識は通用しない社会、生き方の捉え直しを 思想●未来を描くために…過去をしっかりと見据える 戦略●全国共通（基本3点セット）＋空知固有（炭鉱の記憶）…戦略的な組み合わせ 炭鉱遺産●モノを残すことが目的ではない…手段として活用し、結果として残る 具体化の推進●選択と集中 → ネットワーク化 → 拠点の形成	
1. 政策目標	7
1-1 目標年次	
1-2 目指すべき姿	
2. 戦略の根底にある認識	9
2-1 空知産炭地域の変化	
2-2 これまでの歩みからの反省	
2-3 制約の中からの再スタート	
2-4 この戦略を策定する契機	
2-5 この戦略の意義と性格	
3. 基本的な考え方	15
3-1 基本的な考え方	
3-2 最初に着手すべき一手	
3-3 展開の手がかり ①…自然と炭鉱の歴史が織りなす景観	
3-4 展開の手がかり ②…過去と未来を結ぶ炭鉱遺産	
4. 実現の手段 ① – 選択と集中	23
4-1 「選択と集中」の基本方針	
4-2 先導的な拠点の選定	
5. 実現の手段 ② – ネットワーク化	28
5-1 「ネットワーク化」で目指すもの…質×量の最大化	
5-2 対象層による戦略の違い	
5-3 拠点のネットワーク	
5-4 ネットワーク具体化のため最低限必要な足場	
6. 実現の手段 ③ – 拠点の形成	45
6-1 拠点形成の必要性	
6-2 拠点形成のスタディー（赤平）	
6-3 拠点形成のスタディー（三笠）	
6-4 拠点形成の道具だて	
6-5 具体化の手順	
資 料	66

はじめに

戦略の背景とねらい

ここでは、「元気そらち！産炭地域活性化戦略」が生まれた背景と展開の道筋について、その全体像を端的に示します。

背景●世の中の大きな変化…これまでの常識は通用しない社会、生き方の捉え直しを^{とら}

○国境を超えて様々な動きが連鎖するグローバル化、形のある「モノ」から形のない「コト」が価値を持つ知識社会の到来、少子高齢化と急激な人口減少…いま、世の中は急ピッチで大変革が起きようとしています。

➡ 私たちは、大きな変革の渦中にあることを認識して下さい。

○空知産炭地域では、これまでは国の産炭地域振興に頼ってきたことから、地域外の世界とつながるパイプは、主として行政が担ってきました。しかし、行政の窓から見た外の景色は、激しく変わりつつある世界の、限られた一面を捉えているだけです。これでは、「井の中の蛙、大海を知らず」に陥りかねません。

➡ 「井の中の蛙」にならないよう、これからは様々な局面で様々な人が、外の世界の動きを敏感に察知する必要があります。

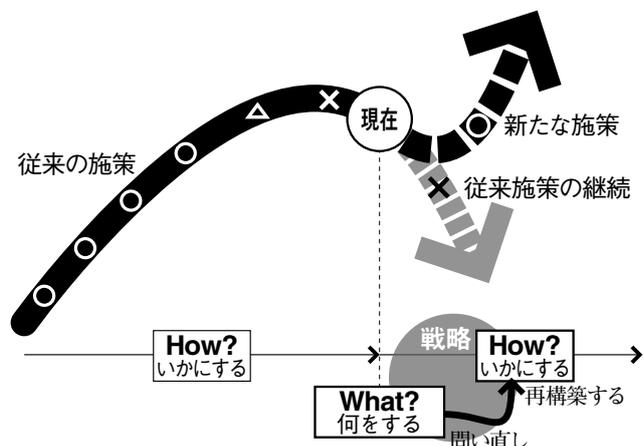
○この大きな変化の前では、対症療法的な治療は、もはや通用しません。時が過ぎるのを待てば、事態が好転するものでもありません。

➡ そのまま流れに飲み込まれてしまうと、地域の存立は極めて危ういものとなります。しかし、ただ流れに追随すれば良い訳でもありません。

➡ 勇気をもって、大きな流れをしっかりと捉え自らの足場を固め、地域活性化に向けて踏み出すべきです。

○表面的な現象に対して個別に対応していても、この大きな変化を乗り切ることはできません。

➡ 前提条件が変わりつつあり、表面的な方法としての従来の常識は、今や非常識になりつつあります。そこで、根本的な部分から、地域の生き方を捉え直す必要があります。

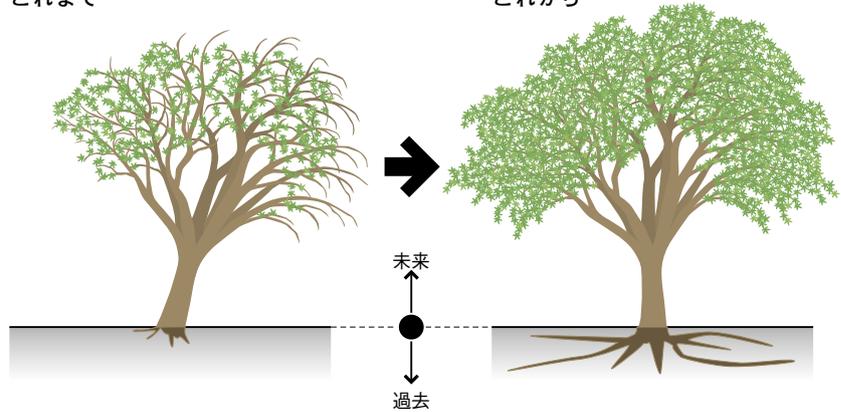


思想●未来を描くために…過去をしっかりと見据える

- 空知産炭地域では、多額の公的資金を投入して、これまで多くの取り組みがなされてきました。しかし、今なお厳しい状態が続いているのはなぜでしょうか？
- 自分たちの地域の特色を考えず、表面的な流行を追い求めてきたことが、根本の原因の一つであると考えます。

これまで

これから



- 今日の地域があるのも、過去からの日々の積み重ねの結果です。過去から眼を背けて未来だけ求めようとしても、地域の個性を主張できない借り物・張りぼてのようなものしかできず、過当競争に巻き込まれて、力の弱い空知産炭地域は翻弄されるだけです。
- 空知産炭地域には、かつての日本を支え、北海道を先導してきたという、人に誇るべき歴史があります。わずか100年余りの短期間に、自然を開拓し、繁栄を極め、急激に苦境に陥った姿は、それを見る人に深い印象を与えます。短い時間の中に、多くの人のドラマや貴重な教訓が濃密に詰まっています。短期間で駆け抜けてきた空知産炭地域だからこそ、明日の日本の姿を考える手がかりを、わかりやすく訴えることができます。

➡「過去を見ずして、未来はない」。未来を描くためにも、過去をしっかりと振り返るべきです。

- 過去をしっかりと見て、それを未来に生かすためには、そのための仕組みづくりが必要です。なぜその場所で、どのようなことがあったのかを理解し、地域の歩んできた営みの意味を振り返ることを通じて、はじめて未来への手がかりを得ることができます。
- しかし、地域内の人にとっては、地域の歴史に気づくことは、余りにも当たり前の日常の光景であるために、難しいことです。そこで、地域外の人々の新鮮な視点によって、自分たちが暮らす地域を見つめ直す「キッカケ」が必要となります。
- そのためには、残っている手がかりは一定の条件の下で保存し、消えてしまったものは映像や文書で見えるようにし、埋もれてしまったものは発掘して再生しなければなりません。

➡歴史をしっかりと見るための仕組みづくりが必要です。それは、地域外の人々の新鮮な視点を「キッカケ」に、地域内の人々が気づき・考え・行動し、未来を創出するための仕組みです。

戦略●全国共通（基本3点セット）＋空知固有（炭^{やま}鉱の記憶）…戦略的な組み合わせ

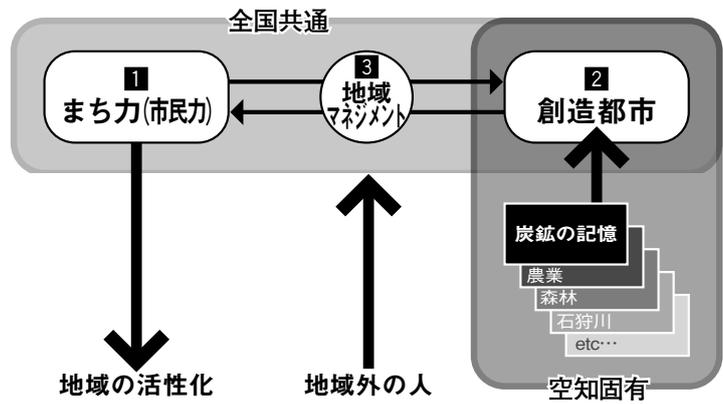
- 空知産炭地域の活性化にあたって、目下の急務は「誇り」の回復です。そのためには、自らが「誇り」を実感できる状況と、「誇り」を持って生活をするための経済的基盤が必要です。
- 「誇り」を回復するために最も効果的なのは、人に自慢することです。自慢するには相手が必要となりますが、それには地域外の人が適役です。地域内外の接触・交流によって動きが出てくると、新たな稼ぎのヒントや経済の動きが生まれます。
- ただし、これまで展開してきた従来型の観光とは混同しないで下さい。空知産炭地域では、大量の来訪者を受け入れる能力や、より高いサービス水準を求める今日の観光の流れに追随することに、一定の限界があります。さらに、すでに様々な「モノ」に投資してしまったので、新たな投資余力は限られています。「たくさん人を呼ぶ」「カネを落とさせる」といった従来型の発想ではなく、価値観を共有し支援してくれる応援団を増やすというスタンスが不可欠です。

➡「誇り」の回復によって、経済的にも社会的にも地域が存続するのに足る条件を獲得するためには、次の3ステップが次第に拡大するような、戦略的な取り組みが不可欠です。

- ① 地域に残されたものを手がかりに
- ② 地域外の人と [ゲストとホスト] という関係を越えたつながりをつくり
- ③ 地域外からの眼差しによる刺激によって、地域内で活性化への力が生まれる

- 具体化のための仕組みとして、地域再生の潮流として世界的に注目されている3つのキーワード、**1 まち力**（市民力） **2 創造都市** **3 地域マネジメント**を基本に考えます。
- 1 まち力**（市民力）とは、市民が地域課題の解決力を持つことです。かつて、炭鉱社会では強固なコミュニティーがありましたが、今日的にこれを再認識し高めるためには、力を発揮する場や契機を新たに設定する必要があります。
- 2 創造都市**とは、様々な活動と価値を生み出すための条件を備えた都市のことです。知的好奇心をくすぐる素材をもとに、眼に見えない知的な価値を生産する人々が集まり、結果よりも途中経過を共有することによって、新たな価値を生み出す力にしようというものです。
- 3 地域マネジメント**とは、**1 まち力**（ローカルな動き）と、**2 創造都市**（グローバルな動き）を仲介し、うまく結びつける働きです。地域内外の要素を適切に組み合わせることで、お互いに持つ力以上の効果を引き出す「1+1=3」となる働きを狙います。

➡世界的なキーワードである3点セット（**まち力**・**創造都市**・**地域マネジメント**）によって、地域活性化に向けた仕組みの基本を構成します。



○これら基本3点セットは、全国共通で、どの地域にも当てはまるものです。空知産炭地域の未来を創出する仕組みとしては、地域の独自性を加えなければなりません。

○空知の特徴として、農業・林業・自然…など様々な要素が考えられますが、地域の歴史性、課せられた制約条件、ここしかないという固有性などから、まずその筆頭にくるのは、《炭鉱の記憶》です。

○炭鉱によって開かれ、多くの人が炭鉱とともに生きてきた空知の歴史を考えると、《炭鉱の記憶》はその本流に位置し、地域内の人々のかかわりも最も豊富です。地域再生のための時間が残り少ないという制約条件を考えると、すでに地域内に蓄積されて新たに買ったり作ったりする必要がない《炭鉱の記憶》は、最も頼りになります。地域外の人に対しては、物的な《炭鉱の記憶》である炭鉱遺産は、最も訴求力の高い素材と目印（ランドマーク）になります。

➡ 空知の固有性・独自性を表現するためには、《炭鉱の記憶》が最適であり最も頼りになります。まずこれを柱にすえて活用し、空知独自の地域活性化の仕組みを構想し実践します。

➡ この動きに触発されて、農業・森林・石狩川・地質…など、他のテーマに沿った活動も追随することが期待され、《炭鉱の記憶》はその先駆的な役割を担います。

○ **1** まち力ちからと **2** 創造都市とは、「鶏が先か卵が先か」という依存的な関係にあり、どこから着手するかが問題です。空知の置かれている状況から、緊急に着手しなければならないのは、地域外の人が空知に着目し地域内の動きへとつなげる **2** ⇨ **1** の仕組みづくりです。

○具体化のためには、実践的な「場」を、「選択と集中」によって効果的に設定し、これらを効率的に「ネットワーク化」することによって、まずは現状打破の突破口を開く必要があります。

➡ まず着手すべきは、外 ⇨ 内の動きをつくることです。

➡ そのために、実践的な「場」を、「選択と集中」の考え方によって効果的に設定し、「ネットワーク化」によって効率的に結びます。

➡ これによって、新たな現実が生まれ、地域内の人々に認識されることによって、現状打破の突破口となります。

炭鉱遺産●モノを残すことが目的ではない…手段として活用し、結果として残る

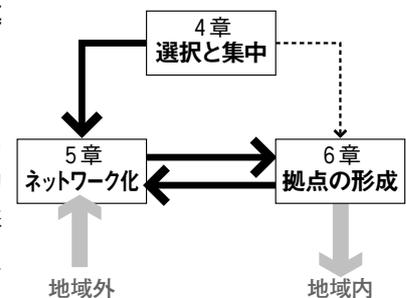
- これまでの地域政策では、「できること」に取り組んできました。しかし、いくら「できること」を重ねても、「やるべきこと」が達成されるとは限りません。
- 空知産炭地域で「やるべきこと」は、今後も持続可能な地域として再生することです。そのために、地域固有の資産である《炭鉱の記憶》が最も貢献すると考え、戦略の柱に据えました。
- この戦略では、地域固有の《炭鉱の記憶》が、地域にとって極めて有用な資産であることを示し、地域内外の様々な主体が実践するための、大きな流れを示すことを狙いとしています。
- その際、《炭鉱の記憶》の一部を占める物的な炭鉱遺産は、具体的な「モノ」があることによって、人々へ訴える力は大きく、有力な手段として活用が期待されます。
- しかし、特に注意しなければならないのは、手段が目的に転化してしまうことです。もちろん、この戦略は、ただ単に物的な炭鉱遺産を残すことが目的ではありません。
 - ➡ この戦略の目標は、物的な炭鉱遺産を残すことではありません。
 - ➡ 物的な炭鉱遺産を手段として活用し、これをもとに地域の活性化に向けた動きが起こり、成果を上げることができれば、その結果として炭鉱遺産は残ることになります。



具体化の推進●選択と集中 → ネットワーク化 → 拠点の形成

- このような基本方針に沿って構想された戦略を推進するために、選択と集中（4章）、ネットワーク化（5章）、拠点の形成（6章）という順で、具体的な手だてを示しました。
- 数多い制約の中で《炭鉱の記憶》を地域活性化に活用するためには、「選択と集中」によって取り組む必要があることから、その先導的拠点となる場所を選定しました。
- 地域外からの支援を得るためには、訴求力のある炭鉱遺産を中心に象徴的な場を「ネットワーク化」し、地域全体の価値を高める必要があることから、そのルートを設定しました。
- ルート上にある先導的拠点は、ネットワークの一つの構成要素として機能するだけでなく、それ自体が明確なメッセージを地域内外に対して発信します。地域外の力を地域内に還元するための変換装置となる「拠点を形成」するために、どのような知見が必要なのかについて、赤平市・三笠市の重要拠点を例にスタディーし、他の拠点の形成に資するツールを提供しました。

→ 「選択と集中」で先導役となる場所を特定し、これらを「ネットワーク化」するルート設定によって地域外からの力を引き入れ、「拠点を形成」によって地域内へと還元します。



1. 政策目標

2018（平成 30）年度の目指すべき姿

ここでは、この戦略の目標年次と、目標年次に達成しているべき望ましい状況について示します。

1-1 目標年次

■目標年次＝ 2018 年度

この戦略が達成すべき目標年次を、2018（平成 30）年度に定めます。

これは、「まちづくりは 10 年作業」と言われているように、地域政策の効果は即座に現れないことから、あまり短期に設定できない反面、空知産炭地域の状況を考えると、あまり長期の設定もできないという、矛盾した二つの要素を勘案した結果です。

■前半 5 年と後半 5 年

前半の 5 年度（2009～2013 年度）では、この戦略の一部が具体化し、新たな現実を眼にした地域内外の多くの人たちの注目を集め始める状態を目指します。

後半の 5 年度（2014～2018 年度）には、前半 5 年の取り組みをもとに活性化へ向けた流れが加速し、各所で幅広い動きが複合的に発生し、目標達成に向けた効果が顕著に現れることを目指します。

1-2 目指すべき姿

最終年次の 2018 年度には、次のような状態が達成されていることを目指します。

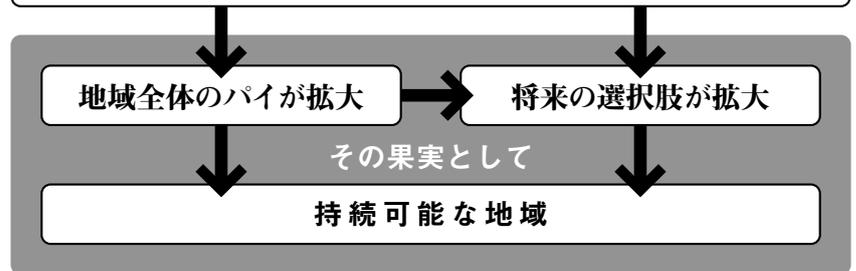
地域内の人	元炭鉱マン	● 自らの労働や人生のドラマを、訪れた人に語っている。 たくましく生きる姿が、気力を失いがちな日本国民に刺激と活力を与えている。 かつての得た知識技能が人から評価され、ちょっとした収入も得ることができる。
	一般住民	● 炭鉱からまちがスタートしたという、地域の歴史的な文脈を理解し誇りを持っている。 地域のあり方と実現手段（政策）について、常にチェックし考えている。
	高齢者	● 炭鉱遺産の場で社会活動を行い、家にこもらず医者いらずの生き方をしている。
	児童・学生	● 地域の歴史や現在の取り組みを、授業の中でしっかり学び理解している。
	企業	● 人の動き（数＜質）から獲得した知識・人脈により、ビジネスチャンスを得ている。
	自治体	● 最大の地域資源として認識し、専門部署の職員が保全活用にあたっている。



地域外の人	北海道民	● 本道発展のルーツとして、一生に一度は必ず空知産炭地域を訪れる。
	一般の人	● 炭鉱に興味がなく訪れた人も、現地で触発されて関心を示す。
	芸術家	● 多くのアーティストが移住・滞在し、場の記憶を生かしたトリエンナーレが開催。
	研究者	● 地域活性化のプロセスが研究対象となり、多様な専門家が課題解決に関わっている。
	道	● 本道の固有性や将来の課題を、最も端的に示す地域として継続支援している。
	国	● 将来の社会をいち早く体現した地域として、そのプロセスに注目し支援している。
海外産炭地	● 同じ課題と炭鉱という共通言語を持つ地域が、ネットワークし励ましあっている。	

その結果として、次のような成果がもたらされ、地域全体のパイの拡大や、将来に向けての選択肢が拡大し、持続可能な地域づくりに貢献します。

- 忘れられずにいて、地域外のいろいろな人が応援してくれる。
- 日本の将来を占う（世界的にみても…）、注目エリアとなる。
- 有為な人の来訪割合が高くなり、人脈・知識など獲得チャンスがUpする。
- 外から刺激を受けて活性化された地域となる。
- 人の動きがおきて、チョットした経済的収益がもたらされる。
- 世の中の動きに眼が開かれる（地域内のコップの中の争いは小事になる）。
- 社会から注目され必要とされる実感を得て、住民は心身ともに健康を維持。



2. 戦略の根底にある認識

現状・課題・前提

ここでは、認識の共有を図るために、この戦略を策定するにあたって踏まえておくべき、現状・課題・前提を整理します。

2-1 空知産炭地域の変化

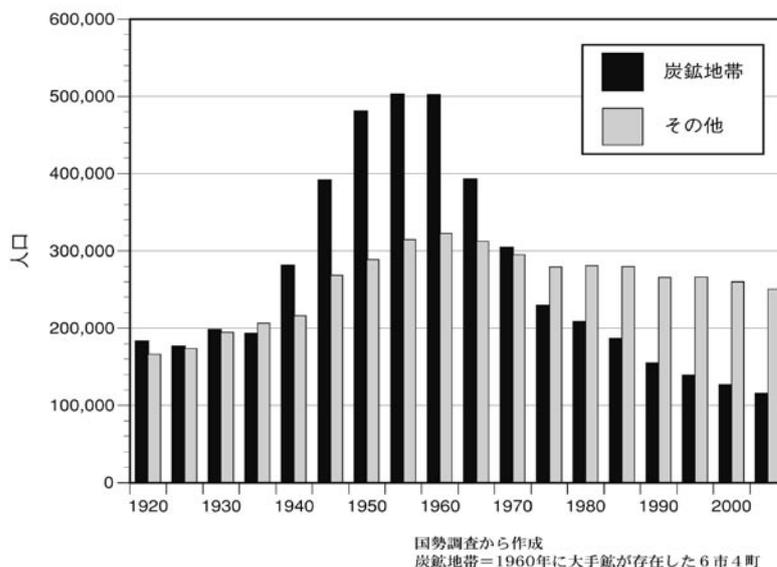
■時代に翻弄される空知産炭地域

1960年代頃のエネルギー革命によって、それまで北海道開拓や日本経済の成長に大きく貢献してきた空知の石炭は、突如一転して、その地位を急激に失いました。

このような環境激変の波は、石炭産業を基幹産業とする空知産炭地域を大きく飲み込みました。その凄まじさは、炭鉱地帯の人口に見てとれます。

1960年から2005年までのわずか45年で、人口は50万人から10万人にまで減少し、人口水準は明治末期の段階にまで戻ってしまいました。

空知支庁の人口推移



この間、空知産炭地域では地域の存立を守ろうと、国の石炭政策による支援を得ながら、様々な施策が展開されてきました。

当時の事情としては、ガラガラと音をたてて地域が崩れかねない中で、緊急事態として無我夢中で取り組んできたのが実情でした。その結果、何とか10万人が残ったと見る向きもあります。

しかし一方では、数十年にわたって国・自治体を合計すると莫大な公費が投入されながら、10万人しか残らなかったことに対する別な評価も、現実には存在しています。

■国の政策の変化

かつて、国土政策の旗印は「国土の均衡ある発展」でした。わが国全体に余裕があった成長期には、アウトカム（投入に対する産出の成果）は重視されませんでした。

それが、国全体が凝縮社会へと転換する中で、資源配分の再構築は不可欠となっています。その流れから、「地域の独自性」「地域の自己責任」が大前提となりつつあり、アウトカムが厳しく吟味される時代になりました。

その中では、「もともと炭鉱地帯は、炭鉱ができたからまちが成立したのであって、成立基盤であった炭鉱がなくなったのだから、もうまちは不要ではないか」という極端な議論すら、聞こえてきます。

ここで国全体の潮流についての是非を、論じ嘆いても事態は一向に打開しません。

「第二の閉山」とでも言える、迫りつつある空知産炭地域の存立を脅かす変化に対して、明確な対抗軸を打ち出して、今日的な危難から地域を守る現実的な戦略と行動が、今こそ強く求められています。

2-2 これまでの歩みからの反省

■これまでの常識を見直す

以上で述べたように、これまでの懸命な取り組みが否定されたり、かつての常識が通用しない状態になりつつあるという現実があります。

ここで今一度、空知産炭地域が常識として持ち続けてきた前提や常識を、改めて見直さなければ、事態は打開できません。

■「炭鉱は暗い」のか？

例えば、空知産炭地域の常識の最たるものとして、「炭鉱は暗いので、その暗いイメージを払拭しなければならない」という合い言葉がありました。

しかし、炭鉱どころか石炭すら見たことがない年齢層は、すでに全世代層の半数を占めるようになっています。

そればかりか、これまで約10年にわたって続けられてきた《炭鉱の記憶》を活用した市民活動では、若い世代やアーティストらが、炭鉱の廃墟に「美しい」「力強い」「心を打つ」といった好意的な評価を下し興味を示す事例が、多々見かけられてきました。

■炭鉱遺産は保存するのが目的なのか？

「炭鉱遺産は、後生大事に保存しなければいけない」という常識の前では、取り組みをためらうかもしれません。

しかし、必ずしも全ての炭鉱遺産を未来永劫お金をかけて保存する必要はないという前提に立つと、取り組みの姿勢や方法も変わってくるはずで、恒久的な保存を前提として足踏みするよりも、逆

に保存を前提としないで現実に取り組んだ方が、結果として将来に向けて保存できる炭鉱遺産の数は多くなるかもしれません。

その他にも、例えば次のような意見が多く述べられてきましたが、これらも全て捉え直す必要があります。

- ・元炭鉱マンの多くは行政依存意識が強い
- ・炭鉱に代わる企業を誘致しなければならない
- ・「モノ」を作れば解決するはずだ
- ・市民活動は特殊な人たちの活動だ
- ・炭鉱遺産はゴミ以外の何ものでもなく価値は全くない
- ・古い「モノ」は汚く恥ずかしい、新しい「モノ」が良い
- ・過去をサッパリ捨てて新しい人生をやり直す
- ・観光とは一人でも多くの人を呼び込まなければならない
- ・確実に予測できることしか取り組まないし、取り組めない
- ・高齢化が諸悪の根源である …

■「井の中の蛙」からの脱却を

空知産炭地域では、ある意味で主張（常識）を変えず一貫して取り組んできました。

しかし、このことが、世の中の大きな変化を感じるができずに、逆に仇になってしまったとも言えます。

常識を見直すチャンスを逸した要因は、地域内を立て直すことに精一杯で、地域外からの刺激を、行政ルート（国⇔道⇔自治体）に依存してきたことが、最大の原因の一つと言えます。

すでに時代は変わりつつあります。操業中の工場を延々1時間以上も撮影した映像DVDが爆発的に売れるような多様な価値観の時代。「モノ」による満足よりも「コト」が重視される時代。時間・空間を飛び越えてインターネットで結ばれる時代…。

このような時代の大きな変わり目は、これまでの常識を見直し、新たな視点から地域の活性化を進めるチャンスでもあります。

■多様なルートで外とのつながりを

もう一つ、これまでの反省から指摘しておかなければならないことがあります。それは、時代の流れとの、地域の認識にズレを生じさせてきた大きな原因の一つとして、自らの取り組みを検証し修正するための仕組みが欠落していたことにあります。

これまでは、行政だけが国に窓を開いて、地域外とつながっている状態でした。これからは、地域の様々な人たちが、地域外に向けて眼を開き、多様なルートでつながりを持っていることが不可欠です。

2-3 制約の中からの再スタート

■数多い制約条件

地域住民の最低限度の生活水準（シビルミニマム）を維持することに窮々とし、死ぬまでこの状況が続けるのは耐えられないことです。

明日への希望を示し、地域を未来に対してつないで行かなければなりません。

さらに、その希望に向けた取り組みは、地域維持のための経費を減らし、かつ地域の価値を表現することによって多少なりとも稼ぎにつながるような、「一粒で二度おいしい」という難しさが求められます。しかし、残された時間は余りにも少ないことも事実です。

地域の歴史的な文脈を顧みずに、単に外から移植しただけでは、思うような成果を生まないということも、これまでの反省から得た教訓の一つです。現実には、すでに軍資金は使い切ってしまい、新たな投資をする余力は極めて限られています。

■炭鉱の記憶…地域最大の未活用資源

このような、数多くの制約条件を踏まえた時に、すぐに活用でき、かつ効果を望める資源は、極めて限られています。

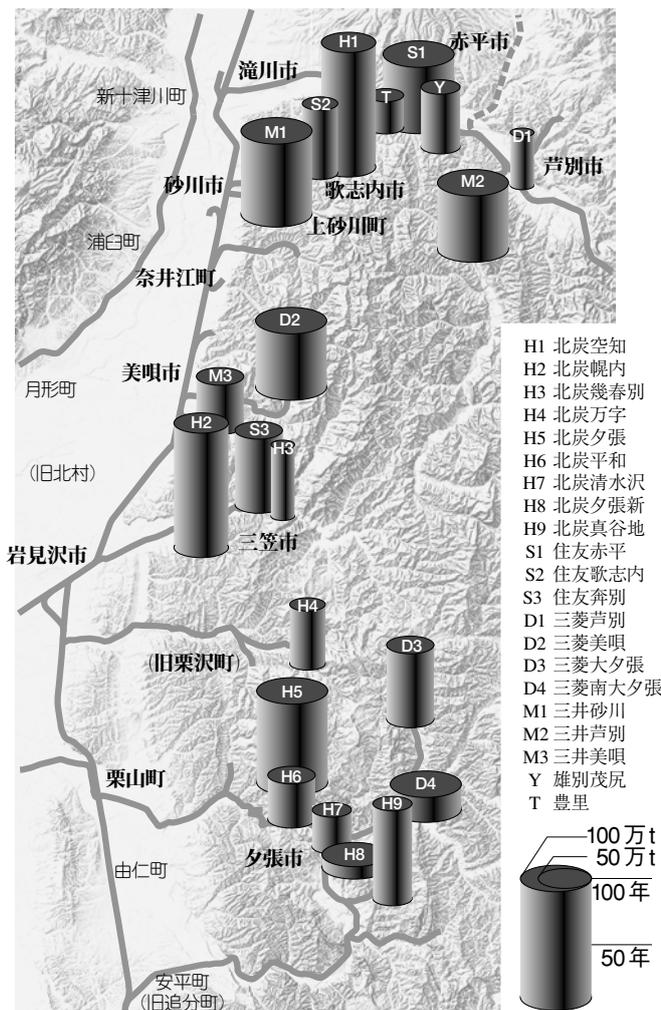
空知地域全体で見ると、活用すべき地域資源は、様々な選択肢があると思います。しかし、空知産炭地域という範囲で捉えた場合には、広域でもともに事に当たることができる素材として、《炭鉱の記憶》は最有力候補となります。

《炭鉱の記憶》の代表である物的な炭鉱遺産は、地域に蓄積されているのに、十分に活用されてきませんでした。炭鉱遺産は、これまでの歴史の歩みを証するもので、多くの人の記憶を宿しています。日本でも最大の炭鉱地帯であった空知産炭地域の《炭鉱の記憶》は、国を超えて世界と結ぶことができる固有の地域資源です。

さらに、すでに地域内に存在するため、活用によって容易に価値を顕在化することができ、仮に失敗したとしても地域に与えるダメージは軽微です。

《炭鉱の記憶》を、「正の遺産」と見るか「負の遺産」と見るかは、どちらでも構いません。しかし、「炭鉱ができたからまちが成立した」という空知産炭地域の生成経緯を考えると、《炭鉱の記憶》から目を背けることは、地域が今日ある意義を自ら否定してしまうことに他なりません。

とにかく、この地域を活性化するためには、地域特有の資源としてきた《炭鉱の記憶》が有力であり、特に地域外の人から見て明確に視認できる炭鉱遺産を手がかりに、地域再生のストーリーを書くことが、最も迅速確実な方法と言えます。



空知産炭地域の炭鉱分布
平均年出炭量と操業期間
(累計出炭量5百万トン以上の炭鉱)

2-4 この戦略を策定する契機

■ 2005年の「炭鉱遺産サミット」

2005（平成17）年11月、夕張で「炭鉱遺産サミット」が開催され、空知産炭地域の首長8人が集まって、炭鉱遺産を手がかりにした地域活性化について話し合われました。

そこでは、「選択と集中」「ネットワーク」「ともに事にあたる」という基本的な合意がなされました。

その後、なかなか具体的な取り組みの機会を得ることができませんでしたが、2007年度から空知支庁の独自事業の取り組みによって、はじめて公式に地域政策として検討されることになりました。



2005年に開催された炭鉱遺産サミット

■ 市民団体による先行的な取り組み

1998年度の空知支庁による独自事業を契機に、空知産炭地域で、市民による《炭鉱の記憶》を活用した市民活動が活発化しはじめました。

ここ10年来にわたって市民による先行的な活動は、一種のテストマーケティングとも言えるもので、地域外に対する訴求力にもそれなりの手ごたえが得られています。

また、そこから得られた知見の蓄積は、この戦略を立案する上で、参考となるものです。

2-5 この戦略の意義と性格

■ともに事にあたるための指針

このような厳しい制約条件の中で、地域活性化のモデルを再構築するには、当然、行政や多様な主体が、各自治体単位で頑張る必要がありますが、それだけでは十分ではありません。また、計画もなく対症的な施策を積み重ねていては、成果を生むことは困難です。

そこで、地域全体での戦略的な取り組みが不可欠です。大まかな戦略や道筋を立て、地域全体が意識を集中し、厳しい中でもできるだけ未来へ投資することによって、はじめて下向きの潮目を変えることができます。

完全な合意（＝コンセンサス）はどだい無理であることを冷徹な前提として、少なくとも「ともに事にあたる」という姿勢の一致（＝アコモデーション）と、やるべきことの範囲（＝ドメイン）の明確化が不可欠です。

この戦略は、これら制約条件と達成すべき要件の狭間にある、狭いストライクゾーンをくぐり抜け、地域活性化を具体化するための進むべき方向を示した指針であり、具体的展開を示唆した教科書でもあるのです。

■戦略の実践が意味するもの

空知産炭地域全体で、このような活性化モデル（仕組みやストーリー）を構築し実行できれば、それは国や他の自治体の手本となり、真の意味での尊敬と支援を得ることができるでしょう。

このことが、炭鉱なき後も空知産炭地域が存在することの価値・意義を疑う主張に対する、唯一の対抗軸となると確信しています。

3. 基本的な考え方

まち力 (市民力)・創造都市・地域マネジメント

ここでは、《炭鉱の記憶》を手がかりにした地域活性化を図る上で、その基本となる考え方を示します。

そのキーワードとなるのは、まち力 (市民力)、創造都市、地域マネジメントの3つです。具体化の突破口は、地域外の力を使って地域内を刺激し活性化することにあります。

3-1 基本的な考え方

■基本的な3つの要素

空知産炭地域の活性化戦略の基本的な構造は、次の3つの要素から構成します。

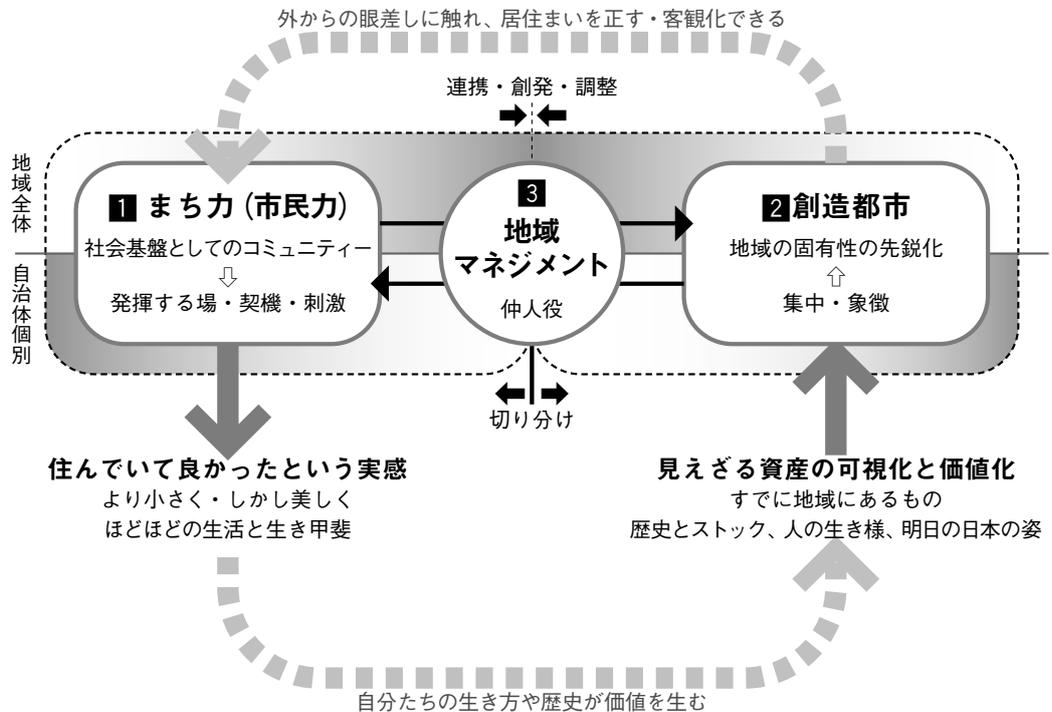
❶ まち力 (市民力)

❷ 創造都市

❸ 地域マネジメント

この3つのキーワードをテコにして、地域内外の循環を生み出すことを基本方針として構想しました。

このような循環構造を生み出すためには、小さな項目から始めるにしても、各自治体単位の個別な取り組みでは限界があります (特に地域外に対して訴求力がない)。そこで、広域で取り組む必要があります。



1 ^{ちから}まち力（市民力）

1 **まち力（市民力）**は、自治の基本である市民が、自分たち自身でまちをどうしていくのかという解決力をいかに高めるかとうことです。

従来の社会基盤は、道路などハードを中心とした公共投資に視点が向けられてきました。しかし今後は、この**1 まち力**が、重要な社会基盤の一つとなると考えられています。

かつての炭鉱には、強固なコミュニティが存在していましたが、今は弱まりつつあります。これを今日的に高めるためには、**1 まち力**を発揮するための、場や契機・刺激が必要となります。

この**1 まち力**は、簡単に生成されるものではありません。地域内での自発的な向上を期待するには厳しい現状にあります。そこで、初期段階としては、地域外の力というエンジンによって、そもそもあった**1 まち力**の遺伝子を呼び覚まし活性化することが必要となります。

2 創造都市

地域外から着目してもらうためのキーワードが、**2 創造都市**です。

2 創造都市とは、大きな社会の変化の中で、世界的に注目されている地域のあり方についての理念です。これまで都市は、芸術・文化・学問・思想・ライフスタイル・価値観など、形のない知識資源を生み出す中心的な役割を果たしてきました。その途中経過（プロセス）からは、都市の活力が生み出され発展してきました。**2 創造都市**とは、このような「創造」の機能を発揮する条件を備えた都市のことを言います。

政策的な観点からは、知的好奇心をくすぐる素材をもとに、眼に見えない知的な価値を生産する人が集まり、結果よりも途中経過を共有することによって、新たな価値を生み出す力にしようというものです。

「すごいことをやっている」「楽しそうだ」…というような、結果ではなく途中経過を価値として共有してもらい、地域の支えになる人を見つけていくことが重要となります。

2 創造都市の具体化にあたっては、自分たちのまちの特色が何かをはっきりさせることが第一の要件です。そのためには、地域資源の集中性・象徴性が必要となります。炭鉱遺産は、そのための目印となり得る最大の資源です。

3 地域マネジメント

地域外と地域内の動きが個別に取り組みされているのは、せっかくの活動が個別・散発で終わってしまいます。そこで、外と内を上手く結ぶための、**3 地域マネジメント**が必要となります。

ここでは、地域（ローカル）と世界（グローバル）の二つの視点を併せて持っていなければなりません。

戦略の具体化にあたって基本となるのは、あくまで自治体単位の個別の取り組み（ローカル）です。しかし、それだけでは十分な成

果を得ることは難しいことから、一方で自分たちのまちは、地域全体の中で何を強調すべきかも念頭におく必要があります。

一方、地域外に向かって発信するには、世界的な視点（グローバル）を持たない限り、力を発揮することはできません。しかし、そもそも外に対する魅力の源泉は、地域内での取り組み（ローカル）に宿っています。

このように、地域（ローカル）と世界（グローバル）という相反する視点を、時々上手く使い分けて、地域全体の成功を、自らのまちな取り込む必要があります。各まちの動きを調整・連携し、地域外の動きとお見合い（マッチング）させることによって、個々の持つパワーの総和を上回る効果（創発効果）が、はじめて実現します。

そのために、結びつけたり通訳するための機能が必要となります。

■外⇒内：外の視点が内に役立つ

「見えざる資産の可視化と価値化」とは、北海道開発を背負ってきた炭鉱を中心とした歴史とストック、そこで働いた人たちの生き様、今日の地域の苦境は日本の将来を真っ先に体験しているという先進性…などの見えない地域資産を、炭鉱遺産を手がかりにして、地域外の人に着目してもらうための入口として活用することです。

これまでの空知産炭地域で最も欠けていたのは、外からの視点です。自分の住む地域と、地域外での動きを比較できる体制によって、自らの地域がおかれている状況、他の地域からみて恵まれている点や、頑張らなければならない点などを、初めて客観視することができます。

それが、「外からの眼差しに触れ、居住まいを正す・客観化できる」ということで、**1 まち力**を促進・強化する大きな刺激として作用します。

■内⇒外：内の生き様がないと外の人注目しない

目指すべきは、地域内の人々が「住んでいて良かったという実感」を持ち、そのための条件が整った地域になることです。

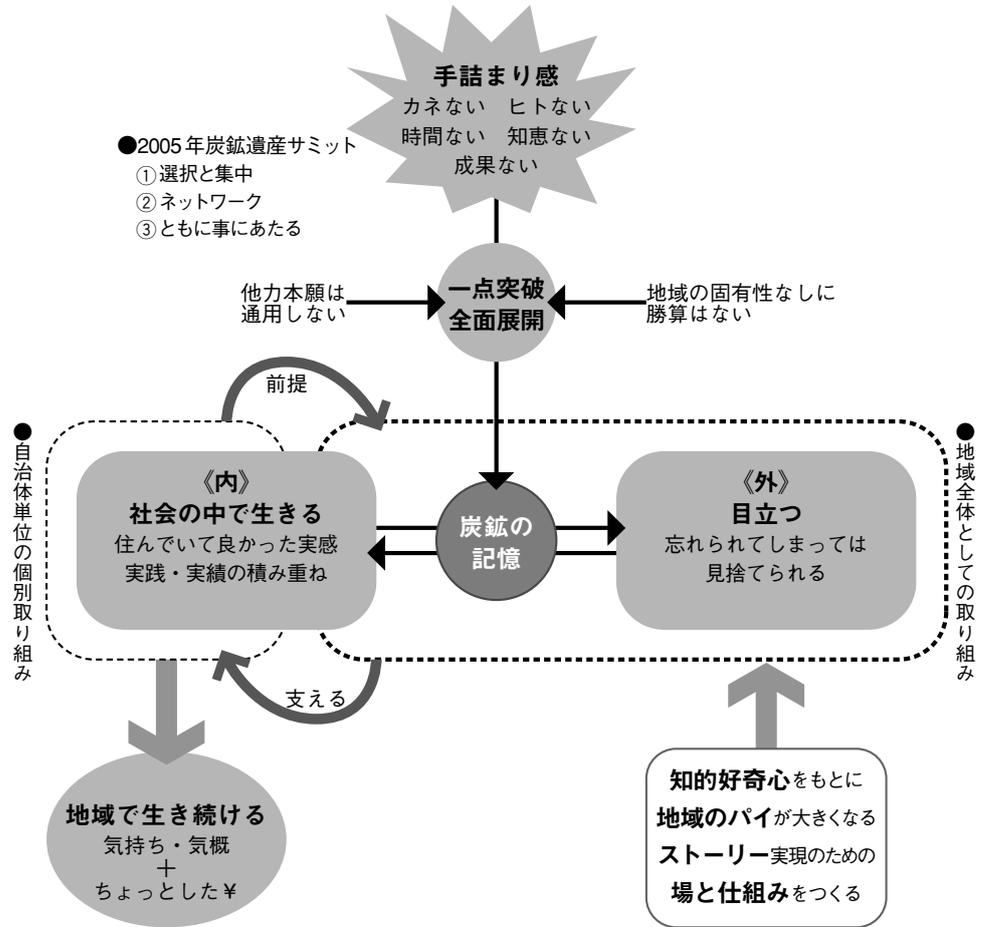
しかし、空知産炭地域では、そういった状況を作る現実的な基盤条件は弱体化しています。

そこで、「より小さく、しかし美しく」や「ほどほどの生活」という縮小均衡策を取りながら、「自分たちの生き方や歴史が価値を生む」というような別の価値観によって「生き甲斐」を実感し発揮できる局面を作らなければなりません。

「住んでいて良かったという実感」を持つことが出来れば、それ自体が他に真似できない資源となります。

ハードは、経済的に豊かなところが新しいものをつくれれば追い抜かれます。しかし、空知産炭地域では、人々の生き様や認識・価値観といったソフトである「見えざる資産」は、他では真似することのできない訴求力を持つこととなります。

3-2 最初に着手すべき一手



■基本は「地域内」の取り組み

地域活性化に向けて、自治体単位の個別の取り組みが基本となります。しかし、具体的な動きを生み出すために必要な、**1 まち力（市民力）**が整っていないことから、まずは地域外からの刺激や支援（**2 創造都市**）をテコに、地域内に力を蓄積することが必要です。

そこで大事なことは、自分たちは「社会の中で生きている」ということを実感する環境づくりです。炭鉱がなくなった産炭地域において、あえてこの地域に住み続ける意味を、今日的に実感することが必要です。

その大前提となるのは、「地域で生き続ける気持ち・気概」です。しかし、それだけでは不十分で、「ちょっとした経済効果」も欠くことができません。

実践や実績を積み重ねて、「社会の中で生きる」ことを実感することで、自分たちで頑張ってみようという気持ちになり、経済的にもプラスになるような仕組みの構築を目指します。

■「地域外」からの刺激を受ける

地域外と関係を持つことは、このような内発的な取り組みを具体化するための呼び水となります。

現在の空知産炭地域は、多くの地域外の人にとって、石炭産業という過去の産業の場であり、石炭対策が終了してすでに対策が済んだ過去の地域として捉えられています。過去をしっかりと見つめるこ

とは大切なのですが、それを未来の姿と結びつけ表現することができないと、忘れ去られてしまいます。

そこで、過去から現在・未来へと続く意味を考え、「自分たちはここで、未来に対して価値のあることを行なっている」「未来の地域を創造するために、これからも取り組み続けるのだ」というメッセージを実践に込めて、地域外にアピールしなければ助力を得ることはできません。

■地域全体で取り組む

これまで、自治体単位で個別・散発的に展開してきましたが、個々のパワーには限界があります。地域外に対して、自治体単位の個別の取り組みでは訴求力が弱く、まず空知産炭地域を一つのまとまりとして認識してもらう必要があります。

そのためには、地域全体で取り組むことが不可欠です。地域全体の地位向上が、ひいては個々の自治体の地位向上につながります。特に戦略の初期段階では、地域外からの刺激を地域内に伝えることからスタートするため、空知産炭地域が外から注目を浴び、「忘れられていない」地域となる必要があります。

■地域外の関心と呼ぶ「知的好奇心」

地域外の人々が空知産炭地域に関心を持つ動機として、「知的好奇心」が有力なキーワードとなります。これは、10年にわたり市民による《炭鉱の記憶》を生かしたの活動を展開してわかったことです。

地域外の人に「知的好奇心」を持ってもらう方法は、単に歴史的事実を知らしめるだけではありません。地域内の人との対話や共同作業、地域外の人々が思索するための場の設えなど、様々な方法があります。

■地域のパイを大きくする

「知的好奇心」をきっかけに訪れる人が、空知産炭地域を巡ることによって、地域の「パイ」が大きくなることを目指します。

この場合の「パイ」には、次章以降で詳しく述べるように、量と質という二つの捉え方があります。

単に観光客が増えて「量的」な経済効果をもたらされるということだけを期待するではありません。「知的好奇心」に刺激され来訪した知的好奇心を持つ人・有為な知識技能を持つ人との関係によって、地域の経済・社会が「質的」に向上するようなことも期待されます。

■これらを実践するための「場」と「仕組み」(ストーリー)の設定

「パイ」が大きくなるストーリーを書き実践することで、地域外の人に注目されることにつながります。

ここでは特に、その実践するための「場」と「仕組み」(ストーリー)を、空知産炭地の中にいかに効果・効率的に埋め込むかが重要となります。

3-3 展開の手がかり ①…自然と炭鉱の歴史が織りなす景観

■地形と歴史に深く刻まれた景観



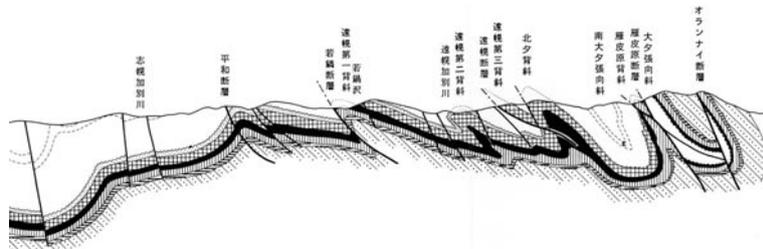
空知産炭地域は、標高の低い山々がつらなり、谷沿いに炭鉱都市と農地、石狩平野では水田を主体とした農地が広がっています。これら、多様な要素を一つに束ねて共有できるような象徴的なシンボルがなく、景観的に見て特別に印象深いインパクトがある訳ではありません。

しかし、石炭を地中に蔵する地質的な特性を踏まえて評価すると、

- 断層・褶曲地形と、それに沿って地形が侵食されてできた谷間の景観…
屈曲した河川、幾重にも重なる山なみ、谷沿いに広がる段丘地形
- 他の地域にはみられない固有の歴史と、それを物語る炭鉱遺産…炭鉱を起源としてまちができ、短期間に栄枯盛衰を描いた濃密な歴史

という、地形と歴史が相互に関連して深く刻まれた、この地域の景観的な特徴が浮かび上がってきます。

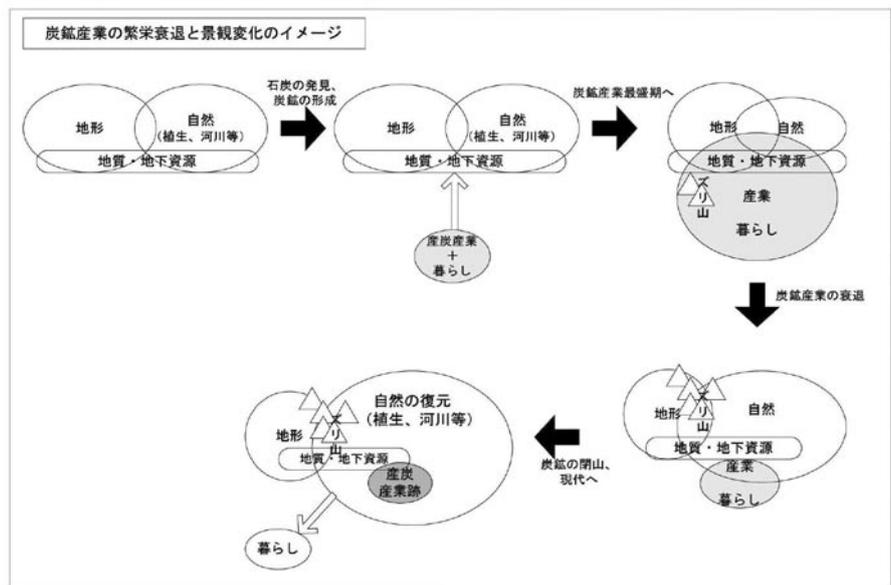
■地質と炭鉱技術が織りなす「まちなみ」Geo-Tech City



空知産炭地域では、河川が侵食した谷間に顔を出していた露頭で石炭が発見されました。ここから、石炭生産のための鉱業施設が展開され、その周囲に炭鉱住宅街や市街地を形成し、石炭を搬出するための鉄道が建設されました。

開拓当初は、地質と地形を読み解きながら、その時代の最先端の技術を導入して、炭鉱とまちの形成がデザインされていたことが大きな特徴です。

その後、炭鉱技術の近代化に伴って、地形の制約は次第に克服されますが、やはり基本は地形を読み解いて、炭鉱住宅をはじめとする「まちなみ」が形成されインフラ整備が進められてきました。それが、今日のまちの骨格を形成しているのです。



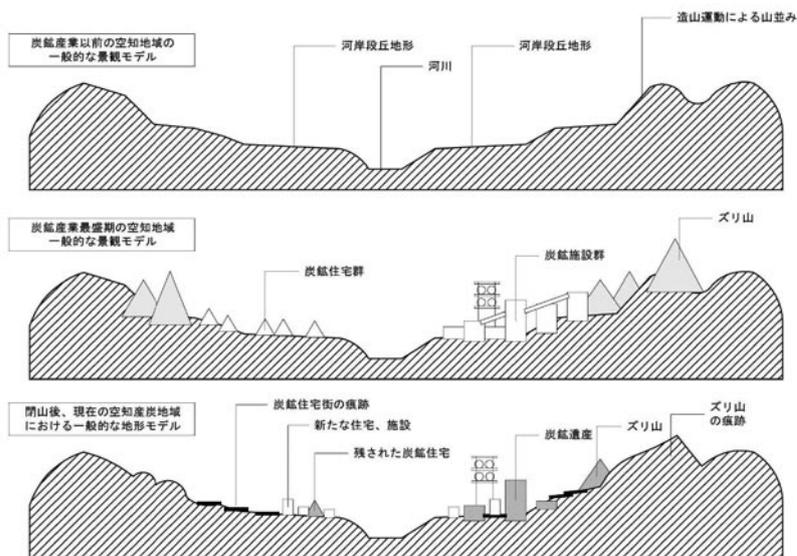
○物語性に富む風景

この地域は、比較的なだらかな山並みを背後に、河川や沢の軸に沿って農地や市街地がひろがり、炭鉱時代の面影を所々に残しています。また、カラマツに代表される二次林が山麓に広がり、軒先の畑など暮らしの息づかいと相まって、のどかな風情があり、懐かしい里山的風景を形成しています。

谷間では、気温差を利用した果樹（リンゴやメロン）、谷が平野に広がるあたりでは河川によって運ばれた肥沃な土壌を活かした畑作（玉ねぎや野菜）、平坦な平野では水田を主体とした農地が広がり、地形や気象条件を読み取った農業が展開されてきました。

石炭産業の衰退に伴い、「まちなみ」を更新するエネルギーが失われてしまいました。しかしこのことは、昭和の時代を思い起こさせる建物や、立坑・選炭機など各種炭鉱施設、ズリ山、炭鉱住宅や共同浴場、鉄道・駅舎の跡、発電所・変電所・送電線、寺社、祈念碑など、炭鉱時代の面影を色濃く残すことになりました。

人によって受け止め方は異なりますが、この地域には、今日のデジタル時代に失われたアナログ的時代のもつ、自然に立ち向かった痕跡としての施設群、鉱山労働者の手仕事もつ力強さと味わいがあります。その一方で、ふる里的な懐かしさなどが相まって、宮崎駿監督のアニメーション作品を思わせる、物語的資源に富む風景が感じられます。



3-4 展開の手がかり ②…過去と未来を結ぶ炭鉱遺産

■「過去の遺産」だけではない多面的な価値

これまで炭鉱遺産は、過去のものとして捉えられてきました。すでに炭鉱がなくなった後も残る巨大なゴミだと思っている地域もあります。

しかし、これまでの取り組みによって得られたことは、地域外の人はその価値について様々な示唆を与えているということです。

〈過去〉の姿を残すというだけでなく、〈現在〉の視点を加えた活用や、〈未来〉に向けた示唆など、炭鉱遺産の持つ価値は多様です。

その価値は、次の3つの視点によって整理することができます。



1 <過去> の価値を評価して残す



従来から主張されてきた価値感で、かつて日本や北海道の役に立ったのだから大事にしようという訴え方です。

これは基本的な価値表現の方法ですが、将来にわたっての訴求力には限界があります。

【鉱業的スケール】決して作り直すことができないもの

【産業と生活の証】そこにあった営みを手繰る入口

【はかなさの美意識】次第に失われ変容する様への思い

【身近な遺産】自分の祖父母や父母らとの関わりを意識（遺跡や法隆寺など歴史遺産にはない）

【古くて新しいもの】回帰や懐古（例：昭和30年代の評価）

2 <現在> の視点を加えて <未来> に活かす



現時点を基準にした考え方で、知的好奇心を刺激するために、炭鉱遺産に今日的な新しい価値を付加するものです。

アートなどは一つの例であり、従来の観光とは異なるスペシャル＝インタレスト＝ツーリズム（SIT）といわれる特別の関心を持った人を対象にした交流が発展する可能性があります。

【芸術のための空間】美術、音楽、写真、文学などの表現空間（場の持つ磁力、大きな空間、歴史の実感）

【際だたせる】文化と自然の対比（産業的自然）、ライトアップやランドマーク

【経過を見せる】環境教育の場（産業的自然）

【知的好奇心を刺激する】巨大システムとしての炭鉱を理解するプロセス



3 <未来> にとって必要な価値を掘り起こして伝える



未来に必要なものを過去の蓄積から掘り起こすために、現時点で何をすべきかという価値表現です。

都市部市民や若年者層には、一緒に何かを行なうことや、ともに助け合うというコミュニティが薄れてきています。これは、未来において必要な機能であり、地域に過去に蓄積されたものに光を当て発掘することに意義があります。

【共同作業】コミュニティー、助け合い、協力の実践的伝承、知恵や経験の実践的伝承

【対話や思索の場】世代間や地域間の出会いと交流、場の持つ磁力に触発された思索

